

## 「私の戦中、戦後の記憶」

父親が帝国人造絹糸（現在の帝人）で仕事をしており、会社の社宅に住んでいました。私は昭和14年生まれで、4～5歳くらいからの記憶があり、この頃国全体が軍備一色で、突き進んでいたそうです。そんな中、幼い子どもたちも軍国少年に育てるための絵本の数々が出版され、その中の一つをよく見ていました。

社宅に住んでいたおにいさんを日の丸が描かれた旗を振りながら三原駅まで行列して見送りに行きました。

昭和18～19年頃から日本の戦況が悪くなり、家にいる女性でも竹槍で戦う訓練が社宅の広場で始まり、子どもや老人は田舎へ疎開させられました。

当時、社宅の西にある旭化学工場の栈橋に大きな船がついていました。汐止土手にはいくつかの防空壕があり、空襲警報が発令されると何家族かで逃げ込んでいました。

あの昭和20年8月6日は6歳で、B29が上空広島方面へ飛ぶのをお母さんたちと見ていました。

その後、広島が新型爆弾で大変なことになっていると伝わりました。お母さんの従兄弟が広島に住んでいて、心配でしたがすぐには行くこともできませんでした。

従兄弟の家は己斐天満小学校前で文具店をしていました。お父さんは戦地へ、お母さん子どもたち4人、うち長男13歳は学徒動員で朝早く家を出ていました。お母さんと幼い弟、2人の妹の4人が亡くなりました。

長男も別の場所で被ばくし、やけどとガラス片で倒れ、収容所へ、後に孤児院に行ったそうです。

お父さんが戦地から復員され、長男を迎えに行きました。

お父さんと長男は戦後食べ物を求め父親の里へ行きますが、当時は被ばく者に接触するとうつるという噂があり、避けられたと聞きます。親戚であつてもこの有様、少年にとって深い悲しみになったと聞いています。

戦争は親戚や身近な人たちの感情までも変えてしまいます。

地球上では今でも戦争が起きている。今や戦争体験者も少なくなり、これからの人たちに怖さや虚しさを伝える事で、戦争のない平和を求めて行動をしていただきたい！

【提供いただいた当時（戦前戦後）のお写真】



（昭和 16 年）



（貝野町通り）



（糸崎神社・昭和 13 年）